研修成果報告書〜秋田県藤里町〜

８月２６日から２８日まで、秋田県藤里町にて国内研修を行った。藤里町の方々、特に高齢者の方々とのを中心としつつ、地域の様々な方との交流を行った。藤里町には、毎年冬に雪かきボランティアや傾聴ボランティア活動を目的として訪れているが、こうして夏にも訪問することで、顔を合わせ、会話する機会が増えるので地域の方々とより深いところで繋がれるのではないだろうかと今回の研修で感じることが多々あった。

一日目はまずは地域のバレーボールチームの方と試合を行った。相手は80代の方もいるのに対し、自分たちは20代の学生である。ルールが普通のバレーボールと違ったとしても、試合に一勝は出来るだろうと思っていた。しかし、アタックされたものならボールを拾うこともできず、何試合しても結局勝つことが出来なかった。どの方も「高齢者」といわれる容姿とはかけ離れた体力で、休憩時間も私たち学生へアタックの指導や練習試合の相手などをしてくださった。こうして週に一度、皆であつまり運動をするというのは、運動能力低下の防止と、コミュニケーション不足の解消につながる。藤里町は一人暮らしの高齢者も少なくはないため、こうして定期的に集まることで安否確認にもなるため、いいこと尽くしである。バレーボール後、生活支援ハウスぶなっち にて傾聴を行った。10部屋あり、10 人の高齢者がそれぞれ個室で生活している。利用者の方にお話を伺ったところ、各部屋で自炊を行うこともあれば、食堂で食事を行うこともあり、個々の生活の中に共同生活がある部分も見られた。買い物は定期的に車で連れていってもらい、まとめてすることが出来る他、買い物を依頼することもできるようであり、一人暮らしが不安な方にとって非常に安心して生活できる場所なのではないかと感じた。

二日目は午前中に一人暮らし高齢者のお宅訪問を行った。２グループに分かれ、私は女性の伊藤さんのお宅へ伺った。伊藤さんは大きな一軒家に一人で住んでおり、部屋も二部屋ほどしか利用していないという。家のドアや窓は常に空いており、近隣の方々との交流も多いため、コミュニケーションを図る機会は多いそうだった。わたしが住んでいるような地域では、在宅中でも鍵やドアを開けっ放しというのはありえないことだったのでただただ驚いたが、こうして開放的な環境であるため、一人暮らしでもコミュニケーション不足にならずに生活できるという面で、藤里町の良さを改めて感じた。また、定期的に社協の方が訪問を行っており、そうしたところでも様々なメリットを感じた。実際にお宅訪問中に社協の方も交えてお話したが、社協の方と藤里の方の雰囲気や話し方、リアクションなどから、普段から交流がありお互い気を許しあう関係であるように感じた。午後は、介護予防プログラムを行う「源さんクラブ」にて参加者の方とお話をした。源さんクラブへ参加している方は非常に活気にあふれており、半年前に訪問した私の顔を覚えてくださっている方もいた。週に一度、様々な地域から参加者が集い、レクや料理、散歩などのプログラムを行っている。お話してみると、部屋中に笑い声があふれ、その元気さに自分のほうが圧倒されている気さえした。様々な年齢の方がいるが、「姉さん」と呼び合ったりしている方々もいる様子から非常に打ち解けあった関係が伺えた。その後、地域交流も兼ねたＢＢＱを行った。社協のかたや、地元の若い方々と様々なお話をすることができた。秋田

では、傾聴を中心的に行ってきたので、高齢者の方々の意見を沢山聞く機会はあったが、現役世代の方々の意見を聞く機会がなかなか得られなかったので非常にいい機会となった。地域で数少ない食堂が閉まってしまったのだが、それをリニューアルする考えなどのお話を聞くことが出来、そういったお話はなかなか聞くことが出来ない内容だと思ったので、積極的に話を聞きに行くことができて良かったと思う。

最終日の三日目は、午前にそば打ち体験を「源さんクラブ」の方と行った。そば打ちは初めてだったので、逆に源さんクラブの方々と試行錯誤、コミュニケーションをとりながらそば打ちをすることが出来たので、同じ立場から同じように物事を感じることが出来たように感じた。中にはそば打ちを見ているだけでいい、という方もいたが、自分が積極的にそば打ちに参加しているうちに、輪に加わってきてくれることもあった。前までは利用者さんや参加している方々に優先的にやってもらうように誘導しようとしていたが、自分が積極的に参加し、楽しむ姿を見てもらうことで利用者さんや参加している方々もやりたいと思ってもらうことが出来るのだと学んだ。午後は社協のデイサービスにて夏祭りのお手伝いと傾聴を行った。社協のデイサービスは天井が高い、全面窓ガラス、壁の仕切りがない、利用者さんの席が指定されていないなど、普段ボランティアをさせていただいているデイサービスとはだいぶ違う、開放的な雰囲気である。その中で、夏祭りと題し、わたあめやきりたんぽ、かき氷など食べ物の屋台から、射的やひもくじなどのゲーム系の屋台を回るというものであった。屋台が本格的であり、利用者さんも非常に楽しんでいるように感じた。ゆっくり回りたい方には急かさず、早く回りたい方には引き止めずに回ってもらうというそれぞれのテンポに合わせた雰囲気で、利用者さんが本当に楽しんでいる姿を間近で見ることが出来、手伝っているこちらも楽しむことができた。

町中や施設、どこでどの方と会話をしても、皆笑顔ではつらつとしており、実年齢よりも若く生き生きとしていた。それは、藤里ならではの地域ネットワークや施設、社協の充実した働きかけが大きく関係しているように思う。私たちが住む都会は非常に閉鎖的で、近所づきあいも少なく、隣人の近況や健康状態を詳しく知ることが出来るのはごく稀である。それに比べ藤里町は、近所づきあいだけでなく地域づきあいが多く、様々な催しや場所に参加することで特定の人ではなく多くの人と様々な場所でコミュニケーションをとることが出来る。これは大きな刺激になり、認知症の予防にもつながるだろう。バレーボールチームや、源さんクラブでの散歩などや、こちらの地域に比べ冬季は雪かきもあるため、足腰がしっかりしており、体力面でも実年齢を上回っているように感じる。

藤里町の福祉はやはり非常に発達し、充実していた。しかし、それを私たちの住んでいるような地域で同じように行うことが必ずしも良いわけではないし、成功するわけでもない。自分の住む地域の特徴や住民の声をとらえ、そのニーズに合った地域づくりをしていくことが重要なのだと改めて感じた。どんなに忙しくても、住民とのコミュニケーションから要求をとらえ、それに応えようと取り組む藤里の社協の方々の働きはすごいことだと感じた。町全体が明るく、活気にあふれている藤里町は本当に魅力的な町だとおもう。今

回のように少人数の訪問にも関わらず、暖かく迎えてくださった藤里町の方々への感謝の気持ちは忘れずにいたいと思う。若者が少ない町で、私たちのような若者の訪問を喜んでくださるのであれば、その期待に応えられるよう、これからも継続した交流が出来るよう努力したいと感じた。そのために、今回の訪問で感じたことや得た知識は後輩へ伝え、積極的に興味関心を持ってもらえるような環境づくりを普段の学生生活の中で行っていきたいと思う。